

演習と実戦は違わんが違う。学問と体験も違わんが違う。浄土真宗の人々は第十八願の話を聞いて喜んでいて、第十八願の身になる事を知らない。感情の猿が御教化に調子を合わせて喜んでいて、自性の牛は居眠りをしているのだから、実機の開発ささるるまでに求道しなければ、不思議の仏智を諦得することは出来ない。

誰でも他人の前に出た時と、独りいる時とは心構えが違う、動作が違う。布教している者も、聞いている者も他所行きの心で有難がつているから、素直に第十八願を諦得したと自惚れているけれども、それは話が判ただけだから、順境に恵まれて無風の航海を続けている時は楽しくも有ろうが、逆縁に出逢い、臨終の時化に出遇うと信仰の難破船になつて沈没しなければならぬのだ。

何故真宗の同行をお慈悲に溺れさして育てているのだろうか。南無阿弥陀仏は光明無量の智慧と寿命無量の慈悲だ。

太陽は智慧の父、慈雨は慈悲の母、父は母はしむ。太陽が照りつけるから物が育つが、慈雨がなければ枯死するのだ。父の智慧が欠けて母の慈悲に甘えたら子供は遊惰に流れるのだ。第十八願でも智慧の側で言えば唯除五逆誹謗正法と叱り飛ばす峻烈さがなければ人間が墮落する。その機が照らし出されて往生の望みの絶えた人を、若不生者不取正覚の慈悲の念力で撰取して下さつてこそ、生まるべからざる者を生まれさせればこそ、超世の悲願とも横超の直道ともならいはんべれと、感謝する事が出来るのだ。

然るに、十劫の昔にお慈悲で助かった事ばかり教えているから、悪人正機を丸呑みにして、何の反省もなく、懺悔もなく、救済さるる事をのように考え、横着な振舞をして浄土に暴れ込もうとしている墮落の信者が多いのだ。それが真宗の発展を阻害しているのだ。

十劫の昔に願行具足、機法一体に成就されたのは、法体成就の機法一体であつて、法蔵菩薩の願行が成就して阿弥陀仏の腕前が出来て正覚を取られたのであつて、凡夫を往生さすに間違いないと言ふ腕前は成就しても私が助かつたのではない。それを十劫の昔に助かつている事を知らなんだ、助かつているのだと平気で十劫秘事の異安心を宣伝しているのだ。だから真の求道者がいないのだ。だから実地の体験者がいないのだ。

この願行具足の名号を衆生に廻向する為に、十劫已来立ち続け、呼び続け、廻向を続けて下さつた念力が逆謗の屍に徹底した一刹那に、仏智が満入した時が、信念冥合の機法一体になるので、十劫以来の劫と一念の信の念とを念劫融即と言つて、十劫以来の念力が、信樂開發の一刹那に「とろけ」て、本願や行者、行者や本願と一体になった時が仏凡一体、機法一体に撰取されたのだ。

その唯信独達の信一念の極意を抜きにして、十劫の昔に助かつているのだと調子に乗せている為に、慈悲に溺れて真劍に求道する者がいないのだ。

機法一体に成就してあるのだから機を見る必要はないと教える人も有るが、成就してあるのなら見せて頂いてこそ懺悔が出るるのではないか、法を説く程機が知らされ、機を突けば法が顕れなければならないのだ。鏡に接近すればする程姿は鮮やかに見えるのだ、法を明瞭に説けば説く程、下根下劣は照らし出されなければならないのだ。法に向け機を見るなどは、鏡に向け姿を見るなど言う馬鹿の言っている言葉だ。それに真宗では我機に用事はなくと包む稽古ばかりして、まるで、腫物に触るような曖昧な信仰でいるが、我機に用事がないのなら法を聞きなさんな。この機を生かす為に十劫以来立ち続けておられるのではないか。親の念力が届いたか、晴れたか、満足が出来たか、と追及すれば、いや我々は骨を折らなくても聖人様が身替りをして下さつてあるのだ、と平気でいるが、勝手な事を言いなさんな。後生は一人凌ぎとあれだけ聞いていゝではないか。聖人が何時、お前の身替りをしてやると言われたか、五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけりと仰

せられてあるではないか。

同行よ二 実地に求道しなさいよ。広い天地が恵まれるのだ。自由の境地が得らるるのだ。魚の鱗は頭から撫でたのでは正宗の名刀を持つてしても鱗は起きない、尻尾からすれば赤錆の刃物でも鱗は起きる。御教化の話を書く位なら一度聞けば判る。自分の自性を包んで感情がお慈悲を聞こうと素直になつてゐる処へ、十劫已来たちづめぢやぞ、八千遍の御苦勞ぢやぞ、証誠護念で、舌切り仏に成つても構わなれどと証明して下さつてあるぞと、流して貰えば、誰も感涙に咽び、有頂天になり、感情に騙されてゐるとも知らず、他力の信を決定したような氣になるのだ。それを観念の遊戯をしてゐると言うのだ。

法のお手元は三仏が証明して下さつて有るぞと教えられて成程と合点して有難がつても機に問うて御覽なさい。聞いたか、頂いたか、開發したか、晴れたか、満足出来たか、仏智が満入したか、開入本願大智海したか、平生業成したか、即得往生したか、現生不退したか、至徳具足したか、転悪成善したか、心多歡喜してゐるかと尋ねて御覽、十劫已来立たしても濟まぬと思はず、八千遍も苦勞さしても氣の毒なとも思はず、舌切り仏に成つてもと証明さしても、まだひよつとちはせぬかと疑うてゐる代物に氣づかずには聞いていると嘯いてゐる程の傲願無恥の悪性だから信仰は微塵劫を超過しても徹底する筈がないのだ。

他力の法の尊高のみを語つて、機受の信相を一寸も語り切らないのは、観念の遊戯をしてゐるに過ぎないのだ。明信仏智と夜が明けたか、行者正受金剛心と自覺がついたか、破闇満願で大満足したか、仏智満入で信前信後の水際が立ったか、唯信独達で真仮の分際が判つたか、平生業成で苦が抜けたか、誓願不思議で呆れたか、法を見てよし機を見てよしの一体に成つたか、今大満足の出来ない者が死後の往生が望めるものか。

雑行も雑修も自力の心も疑いも、何にも知らずに包み込んで、法の尊さに眼をつけて、素直に聞けと言つてゐるのは 信罪福の心を以て本願力を願求してゐる第二十願の果遂の誓の上をうろつてゐる事に氣がつかないのか、そんな自惚れでどうし

て捨身の報謝が出来よう。酒でも飲んで、囲碁でもやっているのが関の山だろう。真宗が自壊自滅しているのが自覚出来ないのか。

合点と深心との区別がつかないのか。演習と実戦との差異の有る事を知らないのか。学問と信仰との区別の有る事が判らないのか。机上の空論と実地の体験と雲泥の差の有る事が判らないのか。御悔やみに行つた時と実子を喪うたと同様と思つていいのか。同行よ二話の判つたのは深心ではないぞ、真の求道は今からだ。真剣に道を求むるを御経や御聖教に

大経 寿命甚だ得難く、仏世亦値いし、人信慧あることし、しかばに求めよ。法を聞き能く忘れず、見て敬い得て大いにはは、則ち我善親友なり。是の故に當に意を發すべし。いに満てらん火をも、必ず過ぎて要めてをかば、会ずに仏道を成じ、広く生死の流れを濟うべし。

大経下卷 是の故に弥勒、いの三千大千世界に充滿する有りとも、要ずに此れを過ぎて、是の経法を聞き、歡喜信樂し受持誦誦し、如説に修行すべし。

安樂集 譬えば有りて空曠のなる処にて、怨賊、刀をき勇をいて直ちに來りて、殺さんと欲するに値遇い、此の人、徑に走りてるに一河をすべし。未だ河に到らざるに即ち此の念を作さく、我河岸に至らば、衣を脱ぎてるとせんや、衣を着けて浮かむとせんや。しを脱ぎてらんには、唯暇なきを恐る。しを着けて浮かばんには、復首領全くし難きを畏る。爾時、但一心に河を渡る方便をすありて、余の心想事成間雑することなきが如し。行者亦爾り。阿弥陀仏を念ずる時に、亦彼人の渡るをうて、念々相次ぎ、余の心想事成間雑することなきが如くせよ。

玄義分 道俗時衆等、おのおの無上心を發せども、生死甚だ厭い難く、仏法復願い難し。共に金剛の志を發して、横に四流を超断せよ。

散善義 復恐らくは、此の水火の二河に墮ちんことを、時に当たりて惶怖すること、復言うべからず。即ち自ら思念すらく、

我廻らば、亦死せん。住まらば死せん、かばせん。一種として死を免れずば、我寧ろ此の道を尋ねて、前に向うてゆかん。既に此道あり、必ず応に度るべしと。

礼讚 人間、総々として衆務を営み、年命の日夜に去ることを覚え、燈の風中に滅して期し難きがし。忙々たる六道、定趣なし。未だ解脱して苦海を出ずるを得ず。云何が安然として驚せざらんや。各強く健やかにして力あるのに聞きて、自策自励して常住を求めよ。乃至 煩惱は深くして底なし。生死の苦海辺なし。苦しみを度するの未だ立たず。云何睡眠を楽わんや。勇猛にして勤めて精進し、心を撰して常に禪に在れ。

和讃

たとい大千世界に みてらん火をもすぎゆきて

仏の御名をきくひとは ながく不退にかなうなり

歎異鈔 各々十余箇国のさかいをこえて、身命をかへりみずして、たずねきたらしめたまう御ころざし、ひとえに往生極楽のみちをといきかんがためなり。

同行よ二 十劫の昔に助かっているのなら聞く必要はないではないか。知らなんだ。助かっているのなら知るも知らぬもいらないではないか。十劫の昔には、どんな難化の衆生でも助けるに間違いと腕前の出来たのが 法体成就の機法一体だ。それが衆生に廻向され、徹底した一念が信念冥合の機法一体で、これを念劫融即と言うのだ。それに十劫の昔に助かっていると云えば十劫秘事で、助かっているのなら信心も安心もいらぬ。聞法も求道もいらぬ。唯素直に話を聞いているだけだから、煩悶もなければ開発もない。歡喜もなければ懺悔もない。唯死んだらお助けと合点しているだけだ。だから真宗には澁刺たる活動がないのだ。

真宗の道俗は右の御聖教を読んだ事がないのだろうか。信後の真似をしているから必要がないのか。

精進に求めるとあるが真剣に求めたか。三千大千世界に満てらん火をも過ぎ行きて生命懸けに熱心に成つたか。無常観と罪悪観に攻め立てられて寢食を忘れて、求道した事があるか。無上心を発せども生死が厭い難く、仏法は願ひ難いのに、無上心は夢にも発した事はないではないか。自策自励して常住を求めよとあるが、他力不思議の世界があると聞いたら何故その境地になるまで徹底して求道しないのだ。各々十余箇国どころか隣村にさえも参詣しないではないか。実地の求道は他人にさして他方の言葉の中で昼寝しているのだもの開発する時期が有るものかい。

大沼は素直にどれだけ喜んでいたか知れないが、三毒の煩惱以外の逆謗の屍が照らし出されて煩悶を起し、卒業は五年十年遅れても、信仰は一息の問題ではないか、と考究院の卒業論文を中止して、寢食を忘れて求道されたのだ。今迄の素直に聞いたり、読んだり、有難がっていたものは悉く吹き飛んで、見える物は無間のどん底から吹き上げる猛火、第十八願から洩れた代物ばかりであった。多くの同行はこんな機はないのか、導く知識はこんな機を知らないのか。若しもこの解決がついたなら、日本国中はおろか、三千世界の者は総攻撃しようとも、逆とんぼに成つてもするぞ。やめるにもやめられず、進むにも進まれず、退く事は猶出来ない、三定死の境地に立った時、逆謗の屍は自分一人であったと往生の望みの綱が切れたのが先か、我能く汝を護らんの如來の撰取が先か、不可称不可説不可思議の信樂は分秒に掛らないが、十方世界の功德を全領して踊り上がったぞ。頭を畳にすりつけて懺悔したぞ。廣大難思の慶心で座敷中を踊り廻り、全身から、血汐を絞る大懺悔をしたぞ。難化の三機の大沼が、難治の三病の法龍が、地獄遁れただけでも大事じゃに、五十二段の跡取りとは、不可称不可説不可思議だ唯念仏するより他に道はなかつたのだ。

この真剣な求道をせずして、御聖教を眺めて有難がっている者は、いくら智者でも学者でも、実地の体験のない人だから信前の人であつて、この一念の深心の極意を突破された人は仮令愚婦でも八万の法蔵を読み破つた大学者なのだ。之を聖教読みの聖教読まず、聖教読まずの聖教読みと言うのだ。

同行よ二 機を包んで他方の真似をして有難がつているのは撰取されてはいないのだ。この機を見ては千年経つても夜は明けないと包んで置いては、無量永劫夜は明けないのだ。明けないと投げた時が自力の機執が捨たるのだ。捨たつた時と助かつた時は同時に心眼が開けるのだ。

真剣な求道によらなければ、信仰の話は判つても、無量永劫の実機の開発にはならないのだ。この一念の信を他力より発得したかせぬかによつて信前信後が決まるのだ。信前の者はお聖教に調子を合わして喜び、信後の者は煩惱の噴き出る儘が御聖教と一致しているのだ。

法界より抜粹